

角川選書

愛と死の伝承

—近世恋愛譚—

諏訪春雄



— 10 —

誹^す訪^わ春^{はる}雄^お

昭和九年新潟県に生まれる。昭和三十一年新潟大学国文学科卒業。昭和三十六年東京大学人文科学研究所国語国文学専門課程博士課程修了。文学博士。現在、学習院女子短大助教授。学習院大学講師、聖心女子大学講師、埼玉大学講師を兼ねる。専攻、近世国文学、近世演劇史。日本近世文学会々員、日本演劇学会々員。著書に『元禄歌舞伎の研究』（昭42）がある。

角川選書 10

愛と死の伝承

昭和43年12月20日 発行

著作者 誹 訪 春 雄

発行者 角 川 源 義

印刷者 中 内 佐 光



発行所

株式会社 角川書店

かどかわしよてん

東京都千代田区富士見2-13 ㊞195208

TEL. 東京(265)7111(大代表) ㊞102

落丁・乱丁本はお取替えます

映印刷・宮田製本

Printed in Japan

角川選書

愛と死の伝承

—近世恋愛譚—

諏訪春雄

角川書店

装丁

日下

弘

目次

はじめに

近世の典型 育たない英雄像 世界とな

った英雄伝説 時代と世話 近世の愛と

死

第一部 青春の残映

一 放浪の青春——お夏清十郎——

むかひ通るは清十郎ぢやないか 流動する

実説 金山をめぐる悲恋 浴衣一つで殺

された清十郎 お夏清十郎は実在するか

演劇にはいった清十郎ぶし 『但馬屋 清十郎 おなつ

卅三年忌』と『但馬屋清十郎五番続』 定

着型と流浪型 『おなつ 五十年忌歌念仏』と

『好色五人女』 近松作の成立 閉じこ

められた青春

二 火の女——八百屋お七——

九

七

元

六

恋の種となった銀の毛抜き 粋な虫出しの
雷鳴 煙のなかに浮かぶお七の姿 いま
ひとつの八百屋お七物語 世間の義理に散
った恋 八百屋お七の実説 火あぶりの
刑 恋路の闇のくらがり…… 歌祭文
の続篇 一中節の八百屋お七物 歌舞伎
の八百屋お七劇 一つの虚像

三 貴種流離——小万与作——

「重の井の子別れ」 流離する貴種 孝
子小万 歌舞伎にはいった丹波与作 敵
討ちとの結合 首の切り口から誕生した若
君 上方系の二要素 馬方とおじやれの
恋 近松の継承と創造

四 紙衣の幻影——夕霧伊左衛門——

名妓夕霧の追善劇 傾城事の伝統 夕霧
狂言成功の要因 七年忌 蓬萊飾りの当
て言 『名残正月』の原型 墓参りは可
笑しうて 『夕霧一周忌』 子役の哀れ
さ 武蔵坊もしびれをきらす 近松の集
大成 傾城のまこと 愛の二態

第二部 死への傾斜

一 恋のメルヘン——お初徳兵衛——

曾根崎の森を血で汚した二人 心中名鑑の
発行 歌舞伎でとりあげたお初徳兵衛心
中 お夏清十郎の世界をかりたお初徳兵衛
劇 残る一つが今生の…… 恋のメルヘ
ン 蜷川の取沙汰、是か正銘 組み立て
られたフィクション 小説とドラマ
『曾根崎心中』の改作もの こらしめられ
た九平次 舞台に呼びもどされたお初徳兵
衛 お家の重宝をめぐるお家騒動

二 閉ざされた性——お種彦九郎——

参勤交代制度 真苧を續んだ女 酒が招
いた夢見たような過失 武士の身こそあだ
なる習なれ 記録にみる実説 登場人物
の検討 実在しなかった敵役 風聞の利
用 百足蜈蚣の違あり 封建制下の小身
武士の悲劇

三 氷雨霏々——梅川忠兵衛——

三三

二五

一五

一五

不穩な時勢　富士山の噴火から綱吉の薨去まで　物価騰貴と犯罪の増加　事件記録あれこれ　切れた爪がとりもつ恋　事件の年時　遊女と客　心中をさせられたふたり　冥途へ旅立った三度飛脚　複眼的方法　改作『傾城三度笠』　『恋飛脚大和往来』の成立

四　抜け荷に賭けた青春——小女郎惣七——

太く短く生きた男女　抜け荷の横行　長崎丸山遊女貞歌の悲恋　流失をまぬがれた毛剃一件資料　毛剃事件の全貌　吉宗の寛刑主義　毛剃事件の判決　近松作の登場人物　趣向にみる当時の抜け荷の実態　抜け荷に賭けた青春

五　女同士の義理——小春治兵衛——

太兵衛の悪態　私娼小春　謎の女文一通　至高の愛　町女房おさん　いりくんだ家族関係　女同士の義理　捨て身の働きかけ　夫婦の長き別れ　家の悲劇　なりひさご心中

主要参考文献
年表
あとがき

二七
二七
二六

はじめに

近世の典型

このごろ、昭和元禄ということばがさかんに用いられている。いずれ、テレビや週刊誌などのマスコミが流行させたことばに相違ないが、この語のもつ語感があたえる元禄というイメージが筆者には気にかかる。恵まれた物質文明を、刹那的、無目的にエンジョイする現今の世相を江戸時代の元禄期にオーバーラップさせて、享楽・怠惰・没理想・華美・無気力などと同じに、元禄ということばをつかった用法のようであるが、そこには、元禄時代に対するある種の誤認がある。

元禄時代は、五代將軍綱吉の在職した時代で、もっとも狭義には、一六八八年（元禄元）から一七〇四年（元禄十七）までの十七年間をさす。

西鶴・芭蕉・近松に代表される文学活動、初代市川団十郎・竹本義太夫などが活躍した舞台芸能、尾形光琳・菱川師宣らの流れをくむ絵画、西陣・友禅などの染織技術が絢爛と開花し、日本歴史上に独自の価値をもつ元禄文化が生みだされた時代である。また、元禄小袖、元禄踊りなどの目もあやな極彩色の美がこの時代に結びつけられて想起される。こうした文化史上のはなやかな結実が元禄時代をこの上もなく華美な豊満な時代とひとびとに印象づけ、表面的な物質文

明の繁栄をみる当今の世相と重ねあわされて、昭和元禄という奇妙な流行語を生み出したものであろう。

しかし、筆者は、自分のせまい専攻分野から判断しても、元禄という時代を、かならずしも民心の定まった黄金の極楽時代というふうに見えることはできない。

たとえば、「心中」ということばがある。元来は、こころのうち、意中などの意で用いられたこの語が、人に対して義理立てする意味となってくる。

遊里用語として、畠山箕山（一六二八—一七〇四）の『色道大鏡』（延宝六年序）に、

心中とは、男女の中戀切入魂の昵び二つなき処をあらはすしをいふ也、これによつて心中する、心中さするといふ名目なり

と説明されて、相手に誠意を示す証拠に、誓紙をとりかわしたり、爪を放ったり、髪を切ったりする具体的行為をさすようになったのは、寛文・延宝（一六六一—一八一）のころであった。

それが、愛しあう男女の情死の意でつかう用法が確定したのは、元禄を過ぎて、宝永・正徳（一七〇四—一七五）の時代を迎えてであった。手練手管としての各種の心中の手段が乱用されたあげく、相手に誠心を示す手段としては、もはや、死以外にはないとするぎりぎりにつきつめた風潮が元禄時代を経ることによって醸成されたのである。

この「心中」ということばの意義の変遷は、そのまま人間不信の念が強化されていく過程を示している。しかし、心中死が多くの場合、金と義理につまъつての窮死であったにしても、とにかく

く、愛するひととの恋愛の成就を、死をもって獲得するという、きまじめな行為が存在したことで、元禄という時代は、当今と大きな径庭があるといつてよからう。

もし、現今の世相と江戸時代の元禄とが、ことばの痛切な意味で一致する点があるとすれば、表面の無事泰平な印象にもかかわらず、内面において深刻な矛盾が進行していたということであろう。

開明的な賢君主としてその治政の初期をかざった綱吉が、生母桂昌院のすすめに応じて、仏教の奨励につとめ、諸寺の修築、創建にはげみ、また、後嗣のないのをうれえて、生類憐みの悪法を發布し、その結果、深刻な財政難をきたしたのは元禄にはいつてからであった。参勤交代による諸士の江戸在住、都市の発達、町人の擡頭等による商品貨幣経済の進展が、この財政難に拍車をかけ、幕府が、相次ぐ貨幣改鑄政策に乗りだしたのもこの時代である。火災や地震がかさなり、物価高を招いて、放縦にして華美な文化を生んだ反面、ひとびとは、生活難にあえぎ、兇惡な犯罪が激増した。

このような時代は、個人と個人とを結びつけていた素朴な連帯感が失われ、中世以来の村落共同体の秩序が激しくゆさぶられた時代であったに相違ない。ことに、激しい商品経済にまきこまれていった畿内を中心とする都市や農村では、それまでの個と個を結びつけていた連帯感にとつてかわって、頼むは自己ひとりとする個我意識に裏打ちされた、新しい町人のモラルを摸索しつづけていた。

西鶴・芭蕉・近松の文芸は、この時代に、こうした歴史的變動を背景として生まれてきた。ことに、近松の世話浄瑠璃は、畿内の村落共同体的秩序からはみだして、都市の商家の丁稚奉公にはいりこんだ若者の新しい環境に適応しえない軽はずみな行動と、これも都会の疎外者たる下級遊女との恋を通して、しかし、まだ失いきっていないひたむきな人間性を描きだしている。

本書は、この西鶴や近松の作品にとりあげられて、現代にまで伝えられた当時の多くの恋愛譚の形成と伝承の経過をきわめようと意図したものである。

近世初頭から延宝・天和ごろまでに形成された多くの恋愛譚が、この元禄時代を通過することによっていちじろしい変貌をとげ、さらに、宝永・正徳以降に発生する新しい恋愛譚が、悲劇的相貌を色濃くおびだすことに、筆者は激しい興味を喚起される。

これらの恋愛譚に盛りこまれた愛と死の伝承には、近世人の夢と願望と死生感がもつともよく表出されている。そこに登場するひととこそ、中世までの典型たる英雄像とはことなる新しい近世の典型なのである。いや、近世を通過して現代にまでおよぶ、卑小にして愛すべき、愚かで情熱的なわれわれ庶民の原像すらそこに求めることができるのである。

育たない英雄像

われわれ日本人は、天神信仰と結びついた菅原道真や頼光四天王、曾我兄弟に代表されるような、伝承のなかに育てられた多くの国民的英雄の伝説を持っている。

古いところでは、倭建命や大国主命、須佐之男命、平安時代にはいると、坂上田村麿や平将門、源平の動乱時代になるともっとも多彩で、曾我兄弟を筆頭に、鎮西八郎為朝、源義経、弁

慶、悪七兵衛景清あくしちびやうえんけきよなどが活躍する。

この力強い国民的英雄も近世にはいるとにわかに種切れとなる。なるほど、宮本武蔵、荒木又右衛門らの劍豪、赤穂四十七士、相馬大作、佐倉宗吾、政岡らの義士節婦は近世にも輩出し、講談や演劇にとりあげられて現代にまでこのひとびとの活躍は伝えられている。

しかし、英雄というものが、動乱の時代に生まれて、時代の動きに先んじて、世界の変革を成就するだけのスケールとエネルギーを持つ人物であるとするならば、また、時代の民衆の夢と希求の念を託されて育てられ、いつの時代にあっても、ひとびとの建設的行為をみちびく規範的人物であるとするなら、近世に輩出したこれらの人物像は卑小にすぎ、力強さに欠け、何よりも儒教的徳目の汚染をあまりに強く全身にあびている。

近世の典型をこれらの英雄像に求めることのできない理由がそこにある。

中世までに生みだされた英雄像にスケールとエネルギーの点で匹敵する近世のチャンピオンはおそらく金きん（金）平びら浄瑠璃の主人公金平であろう。

こまかにぎざんだごぼうをごま油ごまあぶらでいため、醬油しょうゆと砂糖で煮た食品に金平ごぼうというのがあり、太くあらひ縞しまがらの織り物を金平縞きんぺいしまという。また金平たびというのは非常に長持ちする丈夫なたびであり、金平骨きんぺいほねというのは、堅固な扇子せんすの骨である。これらは、すべて、粗野であららしく、しかも丈夫で長持ちするところからつけられた名まえであり、その命名のいわれが、金平浄瑠璃の主人公金平によるといえば、この金平がどんな人物であるか、おおよその見当がつけら

れよう。

金平浄瑠璃というのは、四代將軍家綱時代の明暦から寛文（一六五五―一七二二）のころに、江戸で、和泉太夫、のちの桜井丹波少掾によって語りだされた浄瑠璃ぶしの一流派である。

頼光四天王のひとり坂田金時の子金平を主人公に、渡辺綱の子竹綱、碓氷定光の子定景、卜部季武の子季春、一人武者平井保昌の子鬼同丸らを配して、皇室および源家に忠誠をつくし、かれらの活躍によって、ひとたびは反逆者が出現して、危機におちいった都の秩序を回復し、国家の安泰をはかるという構想を有していた。

金平は、いささかそっかしく、短気で、知謀にとぼしい気味はあるが、武勇衆にすぐれ、正義感の強い、豪快でしかも無邪気な人物として、まだ戦国時代の殺伐な気風を残し、明暦の大火直後の強烈な慰安を求める江戸人の好みにあつて、たちまち当時の民衆のアイドルとなったのである。

かれは敵のくびをひきぬき、怪物をとりひしぎ、岩を押しつぶす。富樫那の雄弁をふるって相手論破し、ときとしては、みごとに推理力をはたかせることもある。

この金平浄瑠璃を語りだした和泉太夫がまた豪快なエピソードに富む人物であつた。力のあるのにまかせて二尺（七〇センチ）ばかりの鉄の太い棒を持ち、それで拍子を取りながら浄瑠璃を語り、興奮してくると舞台装置をこの鉄の棒でたたき割つたので、

親丹波毎日岩をたたき割り

と句にまでよまれた。その子の二代目と泉太夫も人形のくびをひっこぬいたり、たたきつぶしたりしながら浄瑠璃を語ったというから、その激しい語りくちが想像できる。初代市川団十郎がその荒事芸を創始するのに、金平浄瑠璃を参考にしたという伝えもなるほどとうなずかれるものがあるのである。

このままでいけば、金平浄瑠璃の主人公金平は、近世人の生み出したヒーローとして、まれなスケールとエネルギーを持った英雄像として結実したはずであったのが、そのブームは長くつづかなかつた。まもなく金平の転落がはじまったのである。

武勇談のくりかえしがようやく観客にあかれはじめたのか、寛文（一六六一―七三）ごろから金平浄瑠璃に変化があらわれ、濃艶な濡れ事ぬれことの場面などをとり入れ、つや種や滑稽談が登場するようになった。金平の武勇に対する信仰はくずれ、短慮一徹で武骨な性格が誇張されてからかいの対象とされる。本書第一部の諸話の原型が大体このころに形成されたのと興味深い符合である。恋に狂った金平や風流韻事ふうりゅういんじの場で失敗する金平が作品に登場し、ついにかれは道化となって主役の地位からすべりおちることになった。

長雨の無聊ぶりようをなぐさめるために主君頼義さいぎの面前でひらかれた前句付けの会で大あせをかいて苦吟する金平を描いた『金平歳旦発句さいたんはつく』（元禄十一）（一六九八）や雷かみなりとなつて京の六条の遊女屋へ落下してまごつく金平を登場させた『公平奴雷公やうこみなり』（元禄十五）（一七〇二）などは、この稀代の英雄のあわれな末路を示してあますところがない。